

聖火リレーへの思いとは……

—— 沖縄を中心に、聖火をめぐる話 ——

佐野 慎 輔

一 二〇二〇年の聖火は福島から……

二〇二〇年東京オリンピックの聖火リレーは同年三月二十六日に福島県をスタートし、七月二十四日、メインスタジアムとなる新国立競技場の聖火台に点火される。

『Hope Lights Our Way (希望の道を、つなぐ)』

二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は聖火リレーのコンセプトをそう掲げた。「支えあい、認め合い、高めあう心でつなぐ聖火の光が、新しい時代の日の出となり、人々に希望の道を照らし出します」と組織委員会のホームページは書く。そこに「復興」の文字はないが、平成二十三年(二〇一一)に起きた東日本大震災からの復興が強く意識されたことはいままでもない。

聖火リレーのスタートをどこにするか。布村幸彦・組織委員会副事務総長(COO)を委員長とし有識者によって構成された聖火リレー検討委員会でも大きなテーマとなった。自薦、他薦の候補地が数多くあがるなか、昭和三十九年(一九六四)東京オリンピックの聖火台が一時的に

石巻市の運動公園に置かれている宮城県、東京電力福島原子力発電所のある福島県、そして昭和三十九年のスタート地点であった沖縄県が残る。なかでも一九六四年東京オリンピックからの継続という意義があり、スタートが春先となることから温暖な沖縄案が有力とされた。

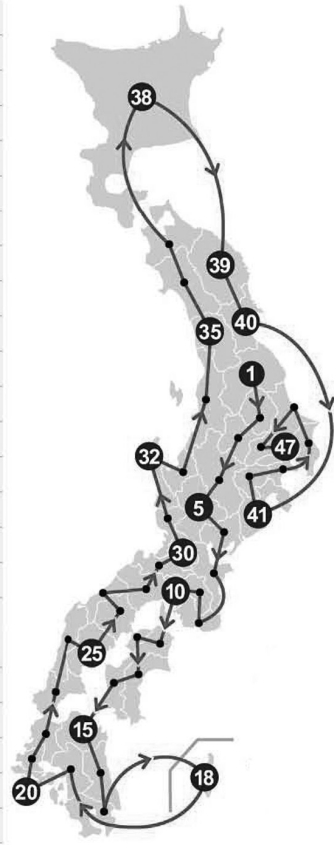
転機は安倍晋三首相のこだわりである。組織委員会からの報告を受けたときに「復興オリンピック」を口にしたことから、流れは被災地からのスタートに傾いていった。それよりも二年前、安倍首相のもとを福島原発事故で休校となった高校の生徒代表が訪問、「福島浜通りでの聖火リレー」を要望した。首相はその約束を果たそうとしたのかもしれない。二〇二〇年は東日本大震災から一〇年の節目にあたることも影響したといえよう。組織委員会の森喜朗会長は改めて、「オリンピック招致の原点は震災復興である」と語った。

その後、組織委員会は国際オリンピック委員会(IOC)と検討を重ね、聖火リレーの概要を決めた。ちなみに「オリンピック聖火とは、IOCの権限の下に(古代オリンピック発祥の地)オリンピックアで点火される火をいう」とオリンピック憲章は定める。

二〇二〇年東京オリンピックの聖火は同年三月十二日、ギリシャのオ

2020年東京五輪聖火リレーの各都道府県日程

① 福島	3月26～28日	②④ 島根	5/16～17
② 栃木	29～30	⑤ 広島	18～19
③ 群馬	31～4/1	⑥ 岡山	20～21
④ 長野	4/2～3	⑦ 鳥取	22～23
⑤ 岐阜	4～5	⑧ 兵庫	24～25
⑥ 愛知	6～7	⑨ 京都	26～27
⑦ 三重	8～9	⑩ 滋賀	28～29
⑧ 和歌山	10～11	⑪ 福井	30～31
⑨ 奈良	12～13	⑫ 石川	6/1～2
⑩ 大阪	14～15	⑬ 富山	3～4
⑪ 徳島	16～17	⑭ 新潟	5～6
⑫ 香川	18～19	⑮ 山形	7～8
⑬ 高知	20～21	⑯ 秋田	9～10
⑭ 愛媛	22～23	⑰ 青森	11～12
⑮ 大分	24～25	⑱ 北海道	14～15
⑯ 宮崎	26～27	⑲ 岩手	17～19
⑰ 鹿児島	28～29	⑳ 宮城	20～22
⑱ 沖縄	5/2～3	㉑ 静岡	24～26
㉒ 熊本	6～7	㉒ 山梨	27～28
㉓ 長崎	8～9	㉓ 神奈川	29～7/1
㉔ 佐賀	10～11	㉔ 千葉	7/2～4
㉕ 福岡	12～13	㉕ 茨城	5～6
㉖ 山口	14～15	㉖ 埼玉	7～9
		㉗ 東京	10～24



リンピアにあるヘラ神殿跡で古代の巫女に扮したギリシャの女優が凹面鏡によって太陽の光から採火される。直ちに第一走者に引き渡され、ギリシャ国内を巡るリレーが始まる。聖火の一義的な権利を有するのはギリ

図1 2020年の聖火ルート図

リシャ・オリンピック委員会であり、開催地・日本に引き継がれるのは八日間にわたるギリシャでのリレーを終えた三月十九日、アテネ市内にある第一回アテネ大会のメインスタジアム、パナシナイコスタジアムで行われる聖火引継式を経たあととなる。

ここから自衛隊機で日本に向けて空輸、三月二十日に宮城県東松島市にある航空自衛隊松島基地に到着。その後、宮城県、岩手県、福島県でそれぞれ二日間「復興の火」として展示されたのち、二十六日に福島県を出発、日本国内をめぐる聖火リレーが始まるのである。

東北の被災三県(宮城、岩手、福島)は三日間、複数の競技種目会場のある四県(神奈川、埼玉、千葉、静岡)も三日間、そして開催地・東京は一五日間の期間を設定し、それ以外の三九道府県は二日間ずつ、都合一二一日間のリレーとなる。都道府県のルートと日程は決定されたが、どこをまわるか、リレー走者の選定は各都道府県に任せられた(図1)。一九六四年を考えれば、到着した自治体ではセレモニーが行われ、沿道は声援をおくる観客で埋め尽くされる。組織委員会は「だれもが参加でき、地域の特徴を生かし、日本全体を盛り上げるリレーにしたい」ともくろむ。

二 聖火リレーとは何なのか？

オリンピックに「聖火」という灯火が登場したのは一九二八年第九回アムステルダム大会である。火は大会期間中、平和や相互理解を目指すオリンピック・ムーブメントの象徴として燃やされ続けた。それ以前、二四年第八回パリ大会までは聖火の登場はなく、アムステルダムでもスタジアムの外に建てられた塔に火をともしただけであった。

古代オリンピックの聖地ギリシャ・オリンピックアの遺跡で採火した火を人の手でリレーして開会式会場に運ぶようにしたのは一九三六年第一回ベルリン大会からである。ベルリン大会組織委員会事務総長でスポーツ研究家、クーベルタン研究の泰斗としても知られたカール・ディーム（二八八二—一九六二）が考案し、ギリシャからブルガリア、ユーゴスラビア、ハンガリーを抜けてオーストリアへ、さらにチェコスロバキアを経由しドイツに至る七ヶ国、三、〇七五キロを約三千人の若者が一二二夜かけてトーチをベルリンに運んだことを嚆矢とする。

いうまでもなく、ベルリン大会は独裁者アドルフ・ヒトラー（二八八九—一九四五）の全盛期に開かれ、巨費を投じた施設を世界に誇り、様式美を高めたセレモニーや女流映画監督レニ・リーフェンシュタール（二九〇二—二〇〇三）による記録映画『オリンピック』は、皮肉なことにその後のオリンピック競技大会の原点ともなっている。聖火リレーもまた、そのひとつであった。ただ不幸なことに、リレーの行程はのちにナチス・ドイツが南下し侵攻していくルートにあたった。このため、聖火リレーはナチスが侵攻のための予備調査であったと指摘され、ディームも指弾を受けた。侵攻への利用はあったかもしれないが、当時の大日本体育協合理事でベルリン大会日本選手団本部役員の田畑政治（二八九八—一九八四）やスポーツ評論家で読売新聞記者の川本信正（一九〇七—一九六）らは「オリンピック精神やIOCの節操が失われたのならともかく、古代と近代の結びつきという純粋な動機から考えついたディームにとってはなほだ迷惑なことだった」と述べている。

古代オリンピックに「たいまつのリレー」はなかったとされる。ただ、古代アテネで開かれていたパンアテナイア大会では大会の最初の日に祭

壇に点火された火をたいまつとして掲げて走ったという話が伝わり、古代ギリシャの壺の絵にも描かれている。ギリシャ神話にプロメテウスが絶対神ゼウスの元から火を盗み出し、人類を豊かに変えたという話がある。古代ギリシャ人は火を神聖視、各ポリスではヘステイア神殿の祭壇で絶やさず守られ、新植民地建設の際には聖なる火が新たに移されたという。ディームは故事にならない、「歴史的な意味」「国を越えた協力」「芸術性」「神聖」を火の継走に込めたのである。

第二次世界大戦による一九四〇年、四四年大会の中止を経て、戦後初のオリンピック、四八年第一四回ロンドン大会では当初、ナチスとの関連から聖火リレーは取りやめるとの話もあった。しかし、大会を盛り上げるイベントだとして継続、実施が決まった。その後の聖火リレー人気はいうまでもない。

公的資金の流用が停止され、新たな財源づくりから始めた一九八四年第二三回ロサンゼルス大会では、放送権の独占、一業種一社からなる独占的スポンサーといった制度を導入するなど、画期的な手法で大会収支黒字を計上した。いまだというオリンピックビジネス、商業主義の原点といてもいいが、当時はこの手法でしか開催は可能ではなく、「背に腹は代えられない手法」だったと当時の組織委員会委員長のピーター・ユベロス（一九三七—）は述べている。その「ユベロス・マジック」とも称された手法のなかに、聖火リレーを使ったものもあった。一キロを単位に寄付を募り、寄付金を集めて大会資金に充当する方策だった。

組織委員会は聖火リレーによって一、〇九〇万ドルの基金を得た。しかし、このお金は大会経費として使用せず、全額YMCAに寄付された。YMCAという公的な活動をする団体の資金づくりを手伝い、オリ

ンピックへの「参画意識を高めるねらい」だったとユベロスは説明した。聖火リレーへの関心の高さを証明する話といつてもいいだろう。

ベルリン大会は特別だとしても、聖火リレーが政治的に使われたのが二〇〇八年第二九回北京大会であった。中国政府が国威発揚のため四兆円とも八兆円ともいわれる巨費を投じた大会である。聖火リレーは世界五大陸をまわり、中国の力を見せつけようとした。ところがロンドン、パリ、サンフランシスコなどで待ち構えていたのは当時、大きな話題となっていたチベットでの人権問題である。北京大会ボイコット、人権問題で中国を抗議する人たちが集会を開くなど、厳戒態勢のもとでリレーされた。日本でも聖火リレーが行われた長野市で抗議デモが起きた。中国のもくろみが逆手にとられたできごととして知られる。

これを機にIOCはギリシャを除く開催国以外の都市をリレーすることを禁じ、リレーされる期間も一〇〇日以内、分火せずに一筆書きでまわるよう定めた。二〇二〇年東京は当初、一九六四年大会のように分火させて国内を隅々まわることも考えていたが果たせなくなった理由である。ただ、「震災からの復興」を理由に一二一日まで期間を延長させたのは組織委員会の努力といえよう。

三 一九六四年の東京は何を考えたのか

(一) 「聖火をアジア各国にまわせ！」

一九六四年東京大会は日本で初めて開かれたオリンピック、アジアに初の聖火がともった大会でもあった。いまでは制約も厳しくなっているが、当時はまだそうした規制もなく自由に発想できた。大会招致に尽力

し、組織委員会事務総長に就任した田畑政治は聖火リレーに大きな意義を込めようと考えた。

それが、「聖火をアジア各国にまわせよう」である。アジア初のオリンピックを唱える以上、アジアの国・地域からできる限り多くの参加を募りたい。そのためには、オリンピックを象徴する聖火をアジア各国・地域を通じて日本に運ぶという発想である。

田畑の意識の底にはふたつの下敷きがあった。ひとつは戦禍拡大で返上、幻の大会となった昭和十五年（一九四〇）第一二回東京オリンピックである。徳川家達（一八六三〜一九四〇）を会長、嘉納治五郎（二八六〇〜一九三八）らを副会長とする当時の組織委員会ではオリンピックで採火された聖火を、アテネからシリアを経て天山南路を通り、新疆、北京、満州、朝鮮半島と南下、日本に運ぶ構想が練られた。この構想は日本陸軍から出たものだったが、ユーラシア大陸を横断する雄大な構想であった。中国大陸を踏査するねらいはいまでもない。

また、田畑は昭和十一年（一九三六）第一回ベルリン大会に日本選手団本部役員として参加、事務総長のカール・ディームとも親しく言葉を交わしている。そのディームは一九四〇年大会ではシルクロードをたどるコースはどうかと「提案」していた。結局、それらは一九四〇年大会返上で具体的な話を始める間もなく消えてしまうが、田畑の意識に埋め込まれていたとしても何ら不思議ではあるまい。

思いが形となって表れるのは昭和三十四年（一九五九）IOCミュンヘン総会で、一九六四年東京開催が決まったあとである。朝日新聞の同僚、矢田喜美雄（一九一三〜九〇）が壮大な計画を持ちかけてきた。ギリシャで採火した聖火をイスタンブールから古代シルクロードをたど

り、中国から日本に結ぶ「東西文化の交流の道」を往くという話である。矢田は社会部記者、のちに国鉄総裁・下山定則が死体で発見された「下山事件」に関わり、他殺説を唱えた記者として知られるが、一九三六年ベルリン大会陸上競技走幅跳五位入賞のオリンピックであり、南極観測の重要性を主張した人物でもあった。矢田の限りないロマンが田畑の琴線に触れ、意識の底にあった計画が浮上してきたといえようか。ただし、シルクロード説は当時の国際情勢（例えば中国とは国交もなかった）を考えると、実現は不可能な大計画ではあった。

この頃、朝日新聞社がユーラシア大陸を自動車で走破する計画を立てている。日産自動車が特別装備の自動車などを提供、協力する企画に田畑は組織委員会として参画を決めた。「聖火リレーコース踏査隊」である。組織委員会の参与で日本のスキー・ジャンプ競技の開拓者、一九二八年サンモリッツ冬季オリンピックで日本人初の冬季大会代表となり、日本人で初めてマッターホルンに登頂した麻生武治（二八九九〜一九九三）を隊長に六人の調査隊を編成。組織委員会からは森西栄一（一九三三〜七〇）も参加、もちろん矢田もマネジャー役として同行した。

調査隊は昭和三十六年（一九六一）六月二十三日、二台の車に分乗してアテネを出発。六月二十八日にはイスタンブールに到着している。イスタンブールでは数日間滞在、現地の関係者とリレーの打合せを行った。アンカラからバクダット、テヘランあたりまでは順調な旅だったが、アフガニスタンに入るとトラブルが続出。下痢や発熱に襲われたり、旅費を盗まれたり、治安の悪さから足止めをされ、反政府ゲリラの出没で思うように車を進めることもできない。カブールからニューデリー、カトマンズ、ラングーン（現ヤンゴン）、バンコクを経て、シンガポールに到

着したのは十二月二十二日だった。一八〇日間、約二万キロの行程は、麻生を含むふたりが途中で離脱する過酷な旅となった。

帰国後に提出された報告書から、組織委員会は「中近東やアジアの複雑な政治情勢、砂漠やジャングルを突破する自然条件などを考えれば、相当な困難を覚悟しなければならず、陸路でのリレーは難しい」と結論づけている。

一方で空路、オリンピックからアテネ、イスタンブール、バイルート、テヘラン、ラホール、ニューデリー、ラングーン（現ヤンゴン）、バンコク、クアラルンプール、マニラ、香港、台北を結ぶコースが決められた。このため、昭和三十七年（一九六二）三月、組織委員会総務委員長の高島文雄をチーフとするミッションを派遣。聖火リレーコース踏査隊が訪問した各地を再訪し、理解を求めた。当時、東南アジアに残っている反日感情を和らげる役割も担った。聖火を日本軍が戦場としたアジアの国と地域をリレーして、日本が真の平和国家として生まれ変わったことを世界に伝えることを聖火リレーの主眼に置いたのである。

ミッションが好感触を得て、七月には高島を委員長とする聖火リレー特別委員会が設けられた。構想の中心にいた組織委員会事務総長の田畑政治はしかし、一九六二年八月にインドネシアのジャカルタで開かれた第四回アジア競技大会の参加をめぐって起きた騒動の渦中に巻き込まれ、辞任せざるを得なくなったが、聖火リレーのコースは守られた。

（二）日本のスタートは沖縄だ

聖火リレー特別委員会は七月四日の設立会合を含め、開催年の昭和三十九年七月六日まで、都合九回開かれた。第一回大会で「国外は空路、

国内は陸路、全都道府県をリレーする」ことを了承、「日本の最初の着陸地は沖縄とする」と決めた。当時、沖縄は日本返還前であり、いまだ米軍施設権下にある。本土との往来にはパスポートが必要であり、沖縄域内での日の丸掲揚は許されていない。

当時の琉球政府、沖縄スポーツ界は東京オリンピック開催が決まった直後から、聖火リレーを沖縄でも実施するよう組織委員会をはじめとする関係機関に強く働きかけていた。日本の「潜在主権」が認められてはいても、いわゆるグレーゾーンの地域である。決定には大きな障壁も予想できた。しかし、あつさり第一回会合でリレーの実施、それも最初の着陸地と決めた背景には何があつたのか。

ひとつ考えられるのは、昭和二十八年（一九五三）に沖縄体育協会が一足早く日本体育協会への加盟承認を受けていた事実である。その後、昭和三十三年（一九五八）東京で開催された第三回アジア競技大会で炬火リレーを実施した際、沖縄がスタート地点となつている。このときは前回の開催地フィリピンのマニラで炬火の火が採られ、空路、那覇に運ばれて島内をリレーされたのち、岩国基地に輸送されて日本入国手続きを行い、その後、鹿児島からリレーが再開された。いつてしまえば予行演習は済んでいたというわけである。ただ、アジア大会当時は日の丸掲揚、沿道での日の丸の取り扱いが禁じられていた。

このとき日本政府は沖縄返還に向けた大きな動きをしていたわけではない。むしろ高まりつつあつた復帰要求に対し、「琉球の生活向上」のための援助に言及し、緩やかな動きに終始しているに過ぎない。もちろん、聖火リレーによつて日の丸のプレゼンスを高める思いはあつたとは思われる。

公益財団法人沖縄県文化振興会公文書専門員の豊美山和美氏は、論文「オリンピック東京大会沖縄聖火リレー―1960年代前半の沖縄における復帰志向をめぐる―」（沖縄県公文書館研究紀要第九号、二〇〇七年三月）でこう指摘している。

「聖火リレーを沖縄返還への世論形成に利用しようという日本政府側の明確な意図は確認できない。当時の日本側の沖縄返還に関する立場は、一九六一年六月二十一日小坂外相がハーター國務長官やライシャワー大使と会談した折り、『日本政府は琉球の日本返還を求めてはいないが、復帰要求を抑えるために、琉球の生活水準を向上させることが決定的に重要である』と述べたことに代表される。（略）北方領土をめぐるソ連との問題もあつて、小坂は日本政府が施政権返還に反対することは『政治的自殺』だと認識していた。米国施政権下の沖縄に日本のプレゼンスは日の丸を確保し拡大することは、自民党としても重要な作戦だつたのではないだろうか」

聖火リレーの政治利用といえどもそれまでだが、復帰に向けた準備の一環とみてとれなくはない。豊美山によれば、琉球政府は昭和三十九年三月に「オリンピック東京大会聖火沖縄リレー実行委員会」を発足させ、琉球側、米軍側それぞれ一〇人の委員を選出。沖縄体育協会会長と米国民政府副民政官による共同委員長のもと、企画運営、財務、広報、走者選考・訓練、コース美化、式典、リレーコース交通整理、医療の八つの小委員会を設け、組織委員会からの補助金約一、〇五七ドルを含む総経費三、二四七ドルの事業を行った。

当時、五、二〇〇万ドル規模の予算をもつ琉球政府には微々たる額ではあるが、「琉球政府だけでなく、民間団体の寄附や関係市町村・団体

の自主的協力のもとで、準備は進められた。聖火リレーの実施は、沖縄にとつて貴重な東京オリンピック参加経験となった。「『よき日本人』としての資質が試される機会」と豊美山は冷静に綴っている。

(三) 聖火が動いた

一九六四年東京オリンピックの聖火は同年八月二十一日、オリンピックのヘラ神殿跡で採火式を行い、ギリシャ国王コンスタンティノス二世の手を経て第一走者に渡された。この様子を見守ったのが高島を団長とする「国外聖火空輸派遣団」。聖火に同行して東京までの道のりに備えたのである。

国外の聖火ルートが正式に決まったのは、前年の九月二十一日。アテネからイスタンブール、バイルート、テヘラン、ラホール、ニューデリー、ラングーン（現ヤンゴン）、バンコク、クアラルンプール、マニラ、香港、台北の一二都市をまわって沖縄に入る（図2）。

当時、外交のなかつた中国、韓国に聖火は通っていない。中国はIOCに加盟しておらず、批判的にオリンピックをみていた。戦火の続く地域も避けられた。そんな時代である。

空輸を担当したのは日本航空DC-6B、当初、戦後初の国産航空機YS-11を使用することも考えられたが、安全性を考慮し、日本航空からチャーターした飛行機を使った。聖火リレー仕様で改造され「シティー・オブ・トウキョウ号」と命名された特別機によって運ばれた空輸総距離は一万五、五〇八キロ、地上リレーは七三二キロ、八七〇区間に及んだ。すべてが順調だったというわけではない。香港では台風の接近で強い雨にたたられ、九月四日夜、啓徳国際空港に到着。九龍市街、

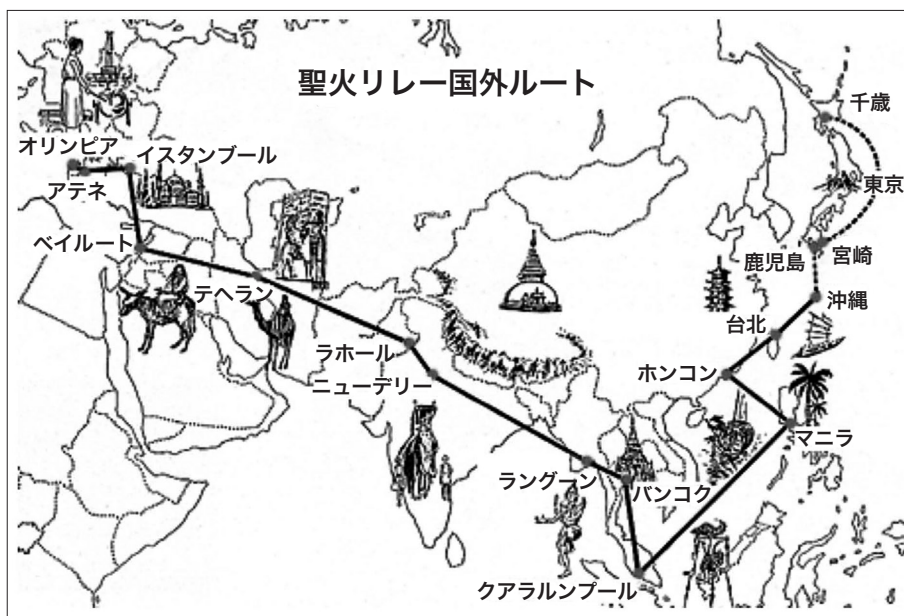


図2 1964年の聖火リレー国外ルート(第18回オリンピック競技大会・公式報告書より)

香港島をリレーしたあと係留中に台風のために補助翼が故障、飛行不能に陥った。急遽、羽田空港からコンベア880Mショット機あやめ号を呼び寄せ、一日遅れで六日に出発。しかし離陸直後、エンジン故障で引き返し、定期便として就航中の同型機かえで号に乗り換え、ようやく台北に到着する事態となった。一日遅れで、しかも夜になっていたが、台

北・松山空港には数多くの市民が聖火の歓迎に訪れたという。当時、朝日新聞をはじめ毎日、読売など新聞各紙は移動特派員を同行させて、連日、紙面を大きく割いて報道していた。

九月七日、修理を終えたシティー・オブ・トウキョウ号が台北を出発したのが、午前九時一〇分。一二時に沖縄・那覇空港に到着した。聖火は熱烈な歓迎を受けた。

沖縄での日程は五日間。那覇空港で高島が持つ特別容器からトーチに移され、第一走者宮城勇さんが歓迎会場の奥武山競技場に走り込むと、二万とも四万人ともいわれる沖縄の人々が一斉に日の丸の小旗をうち振った。このうち、那覇から南部をめぐり北部の現在の名護市嘉陽の地にまで踏みいつている。島内ではどこでも熱烈な歓迎を受けた。豊美山は、「戦後の沖縄でこれほどまでに日の丸が誇示されたのはこの時が初めてだろう」と書き、「沖縄が祝祭的時間に酔った5日間」と評した。

聖火リレーが昭和四十七年（一九七二）の沖縄復帰の時期を早めたかどうか、それはわからない。ただ平成三十一年（二〇一九）のいまでは考えられないほど、沖縄が本土に寄り添ったときであったことだけは間違いない。

聖火リレー特別委員会が決めた国内のコースは四ルート。鹿児島を起点に日本海側を往く第一コース、第二コースは宮崎から太平洋側を北上した。第三、第四コースは北海道から日本海側、太平洋側を南下した。ゴールは東京である〔図3〕。

ちなみに香港での一日遅れを取り戻すべく、沖縄に到着した聖火は分火され、片方は先に鹿児島に送られた。沖縄島内をめぐった聖火は熊本で合流している。空輸総距離二、六九二キロ、地上リレー総距離は

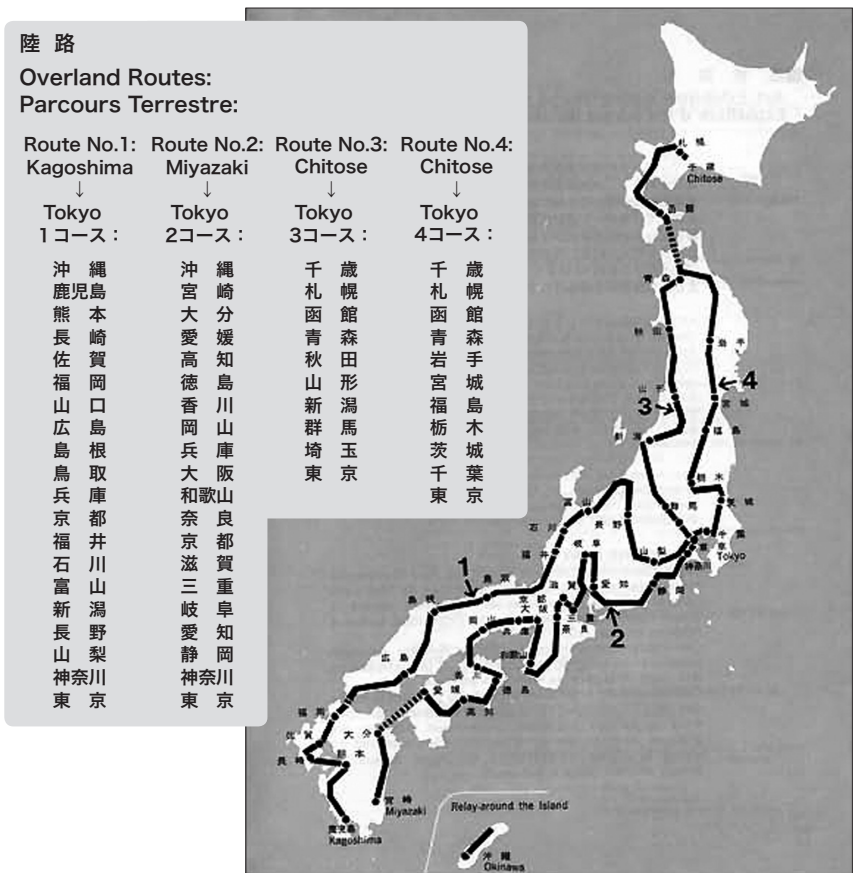


図3 1964年の聖火リレー国内ルート（公式プログラムより）

六七五キロ、四、三七四区間に及び、一〇万七二三人が正副聖火ランナーとして走った。

沿道の人出はのべ二、八七〇万人、警備要員のべ九万二、二三七人。全国紙は日々の動きを刻々と伝えた。一方、各地方紙はそれぞれ道府県の熱狂ぶりを一面から社会、運動、地域面まで使って詳報した。聖火が宿泊した村の村長が自宅床の間に安置したり、嚴重な警備は当然、聖火を

主人公とした一大ドラマが日本中を席捲した。

四 聖火リレー異聞

東京オリンピックに先立つ第三回アジア競技大会の聖火の空輸は海上自衛隊の対潜哨戒機が使われた。しかし、オリンピックで軍用機を使うことは国際的な手続きが煩雑となる。そこで当初、開発中の国産機YS-11のデビュを兼ねた輸送が考えられた。型が小さく、アジア特有の狭い空港、短い滑走路に耐えられる機種として期待がかかった。同機の使用はほぼ決定的とみられていたが、国外ルートでは日本航空DC-6Bに変更された。なぜなのか。

YS-11を飛ばしてみても初めて横方向の揺れに不安があり、操縦がしづらいことがわかった。このため開発スケジュールが変更されて、国外使用が間に合わなくなった。その後、開発が進み、ようやく昭和三十九年八月、運航のための「型式証明」を取得し、国内リレーでのお目見えが決まった。聖火はすでに国外リレーの最中であつた。

そのYS-11が就航できなかったことで計画が変更された聖火リレーがある。ネパールのカトマンズである。滑走路が短く、DC-6Bでは降りられないため、当初予定を変更した。ネパールのオリンピック委員会が王室の専用機をインドのニューデリーまで飛ばして聖火を分火、カトマンズ市内をリレーしたのち次の寄港先であるカルカッタに戻したのである。アジアで初のオリンピックへの期待感の表れだったと解釈できよう。しかし、東京オリンピックの報告書にはカトマンズの名はない。

大会組織委員会事務総長だった田畑政治の辞任はある意味、解任には

かならない。彼は前述した通り、一九六二年ジャカルタで開催された第四回アジア競技大会参加をめぐる混乱の責任をとる形で、事務総長を辞めた。詳しく言えば、主催国のインドネシアが親交のある中国やアラブ諸国に配慮、台湾とイスラエルを招待しなかった。これを国際オリンピック委員会（IOC）は重視し、スポーツへの政治介入を嫌った国際陸上競技連盟が「アジア競技大会に参加した連盟の除名」を発表する事態となった。選手団団長として参加していた田畑は、現地での混乱をさけるために参加を決定、他国の衝撃を和らげようとした。しかし、帰国後にこの対応を問題視されて辞任に発展したのである。一説には、さる大物政治家から疎まれた末の「解任劇」だったともいわれる。

このアジア大会問題はその後、昭和三十八年（一九六三）にインドネシアが開催した新興国スポーツ競技大会（GANEF）参加問題に波及、IOCがこの大会を容認せず、国際陸連と国際水泳連盟はGANEFに参加した選手の資格停止を東京大会までに解除しなかった。大会組織委員会は最後まで参加の道を探ったものの、インドネシアと北朝鮮は開会式を前に帰国を余儀なくされた。国交のない北朝鮮は当然ながら、東南アジアの大国インドネシアの首都ジャカルタも聖火リレーのコースから外された。

また、聖火リレーのコースにあたるトルコとキプロスとの領土問題が紛糾、ビルマ（現ミャンマー）では二年前にクーデターが起きて政情が不安定ななか、聖火はリレーされた。しかし、中国はオリンピック期間中の十月十六日、新疆ウイグル自治区にあるロプノール湖で初の核実験を実施するなどオリンピックとは無縁の世界にあつた。

一九六四年とはそうした時代だったのである。二〇二〇年、東京には

中国も、インドネシアも参加してくるだろう。北朝鮮は韓国と合同チームを結成するかもしれない。

一方、朝鮮半島をめぐる状況、太平洋を挟んだ米国と中国の状況はどのように変化していくだろうか。聖火がギリシャ以外の国をめぐることはないものの、予断をもって語れない時代を、聖火はどのようにリレーされていくのだろうか。

リレーのクライマックスは国立競技場での聖火点火である。最終走者は誰になるのか。

昭和三十九年は報道各社が総力を挙げて取材を行い、秘匿の義務を負う組織委員会には必死に候補者の身柄を囲い込んだ。激しい取材合戦の末に、一九歳の早稲田大学生、坂井義則（一九四五～二〇一四）を最終走者としてスクープしたのは朝日新聞である。スクープのうらに同じ広島県出身の早大競走部OB、日本のオリンピック金メダル第一号であり、朝日新聞運動部長も務めた織田幹雄（一九〇五～一九九八）の存在があったとされるが、朝日新聞は当初から深く聖火リレーにかかわっていた。

坂井は、広島に原爆が投下された昭和二十年八月六日に広島県三次市で生まれた。直接、原爆の影響をうけたわけではなかったが、「平和の象徴」「スポーツの象徴」「未来の象徴」としての選出であった。選考理由を強く主張したのは田畑である。坂井は早大競走部所属の美しいフォームで走る中距離走者でもあった。

二〇二〇年ほどのような人が選ばれ、そこにどのような思いを託すのだろうか。スポーツ界の象徴なのか、この大会の大きなテーマである「復興を象徴」する人物だろうか。それとも、「未来を担う」視点から選ばれるのだろうか。いずれにせよ、世界に「日本」を発信する象徴となる

ものと思われる。

【主な参考文献】

- ・『第一八回オリンピック競技大会公式報告書』（オリンピック東京大会組織委員会編、一九六六年）
- ・『日本体育協会、日本オリンピック委員会100年史』（日本体育協会、日本オリンピック委員会編、二〇一二年）
- ・『OLYMPIC CHARTER』（国際オリンピック委員会編、二〇一六年）
- ・『カール・ディームの生涯と体育思想』（加藤元和著、一九八五年、不昧堂出版）
- ・『評伝 田畑政治』（奈代哲雄著、一九八八年、国書刊行会）
- ・『人間田畑政治 オリンピックと共に五十年』（ベースボール・マガジン社編、一九八五年）
- ・『1964東京五輪聖火空輸作戦』（夫馬信一著、二〇一八年、原書房）
- ・『オリンピック東京大会沖縄聖火リレー——一九六〇年代前半の沖縄における復帰志向をめぐって』（豊美山和美著、『沖縄県立公文書館研究紀要』第九号、二〇〇七年）
- ・朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞

著者プロフィール

佐野慎輔（さの・しんすけ） 昭和二十九年（一九五四）富山県高岡市生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、報知新聞社を経て、産経新聞社入社。運動部次長、シドニー支局長、外信部次長、編集局次長兼運動部長、取締役サンケイスポーツ代表などを歴任。現在は産経新聞特別記者兼論説委員。傍ら日本オリンピックアカデミー理事、笹川スポーツ財団理事上席特別研究員、早稲田大学、立教大学非常勤講師を務める。東京オリンピック・パラリンピック組織委員会メディア委員でもある。スポーツ記者としては三〇年の経験を持ち、野球記者一五年、オリンピック担当一五年。野球殿堂競技者表彰委員。著書に『嘉納治五郎』『金栗四三』『オリンピック略史』、共著に『オリンピック・パラリンピックのレガシー』『スポーツ・エクセレンス』など多数あり。